

良夜招尋繼舊盟 文筵不厭主人情 青松長結歲寒約 爲報清風滿座聲。

即不堪感情作一首

思へとや軒端の松も音すゞしはれ行く夜半の雨の名残を
一、松月寺に詣づ

十二日は先考の忌日なれば、松月寺に詣でて。

在し世に問こし雪の袖ならばなどかく斗り萎れはつべき
歸宅の後、柳に雪のかゝりたるを見て。

是も又花にあらそふ色ならめやなぎの糸にかゝるしら雪

一、東叡山釋菜の儀

去月廿一日東叡山の聖廟へ上様御成、辰刻御出午後刻還御也。先づ林氏國史館の内新亭迄被成御座、御長袴にて御上香御拜禮、老中阿部豐後守・戸田山城守揚廉、高家昌山民部大輔執酌御飲福、牧野備後守・喜多見若狹守御劍持之。其外老中・若年寄・御小姓衆皆庭上に侍ひ、重て國史館へ渡御、弘文院春常見臺拜領にて書經堯典を講釋す。臨時の釋菜執行有之。御成前柳澤出羽守・南部遠江守を以て、聖堂へ銀甕二・奇南香被献、甕中の酒を以て御飲福被成候。講釋了て御

吸物御盃臺にて、弘文院春常御盃頂戴、且又御囃子三番有之、御仕舞被遊、春常老母并妻へ贈物有之、御太刀・馬・御樽・嘉肴献上也。

一、御祖先牌前へ新穀被獻候事

是歲六月越中より新米獻之。此時老中迄被命候は、如此の品は先づ御祖先の御牌前へ可被獻事と思召候。新穀の認様迄も、年寄中僉議にて出来、御使番を以寶圓寺迄被遣、高德公御牌前へ被備候。向後新米の外新果・新菜等必ず可被獻との儀。八月八日梨實一籠宛、高德公・瑞龍公・微妙公・陽廣公・天徳夫人・清泰夫人御牌位へ被備、各御使番勤之。是等の趣今年新に被命也。

一、歳暮

いかにせむ三十に餘る四の緒の年の此方に引ぞわづらふ

一、己巳歳旦試筆

筆の海くむともつきじことの葉の花の浪たつ春を迎へて

春たつころを

しかすがに雪氣の雲も打かすみ空にしらねのけさの初春

早春梅

雪深き窓の梅がえ如何してけ
きたつ春をまだきしるらん

雪深き宿も軒端の梅がえに今朝たつ春のいろは見えけり

早春風

今朝はまづ水をくたく春風の
花の下紐いつかたかまし

降雪の花の浪たつはるかぜや白根をこえて先わたるらん
國つかぜおだやかにして、國民の君徳になつき侍ることの、いとまめやかなれば、おもひつゞけ侍りける。
くに民のかまどの煙たちそひて霞もふかき春は來にけり

早春霞

明そむる雲井を春やわたるらん霞にくもるやまあぬの空

一、三尺と號する屏風の儀

古來號三尺屏風は、爲四尺七寸の由、出所有之事の旨御直の仰拜聽。此事因秘藏の儀_左恐記置也。昌興

一、山雪漸消

五日蒼天甚快晴。日和風暖。山雪漸消。

山の端に積りし雪もきえ初てのどかにわたるけさの春風
まことある春のころをしら雪の光やはらぐ今朝の山風
山の端も今朝ぞ霞に色そへぬ昨日はうとき春にも有しか
うづもれし谷の柴橋雪とけてあらはれわたる今朝の春風
一、宗長傳來の文臺

むかし宗長所持の文臺、横山左衛門忠次の家に傳來せしを、先年淺井源右衛門政右模之、以爲家珍。幅一尺一寸八分斗、高三寸斗、厚三分斗、無返三分斗、以楡造之。其本は桐也。政右以楡模之、栗色に染之。蓋黒みの金具也。裏に朱漆にして紫屋の二字あり。端に黒漆を以て、政右自詠を二行七字に記。于時詠歌あつて云。

いや高き峯の柴やの月影を苔のしづくにうつしてぞ見ると也。此事山本孫八郎惟明が語りしによつて聞之。舊臘附佐々喜藤次正業、許借之事を政右に達しけるに、則可恩借と也。依て送書於正業、件之文臺借之。如此名品等閑に申條、頗非本意の間蜂腰一首を詠す。

昔時柴屋老人所藏の文臺、往年政右雅丈被模置のよし、傳聞き侍りしまゝ暫時許借を望侍るとて。

うつしおきて我も昔を忍ばゝや嶺の柴屋の月のひかりを

一、春光無比類

十八日春光無比類れば詠じ侍る。

四方の空くもらぬ春の光かな霞はそれとたちわたれども

一、詠獻紅梅

廿七日頃餘寒特に甚し。紅梅咲たるを御尋の處、鹽川安左衛門治賢が宿の梅咲たるよしにて獻之。花好花也。